

標準神経病学 第2版

水野美邦 ● 監修

栗原照幸, 中野今治 ● 編

新潟大学脳研究所教授・神経内科学 西澤正豊

神経学の代表的なテキストとして、医学生だけでなく、リハビリテーション学生、薬学生にも広く読まれてきた『標準神経病学』が、初版から11年ぶりに改訂されたことをまず歓迎したい。本書の母体となった『神経病学』は田崎義昭・吉田充男両先生の編集になるユニークな、しかも高度な内容を含んだ神経学のテキストとして名高く、当時レジデントであった筆者も愛読していたものである。

その後継書として、標準シリーズの1冊として出版された本書の初版は、神経学をわかりやすくという視点から、神経系の構造と機能を中枢から説き起こすことを避け、神経系の症状を一番末梢の筋肉から順に末梢神経、中枢神経系にたどるという独創的な編集方針が採用された点で、類書にないユニークな構成をとっていた。この考え方は、例えば、筋力低下をみて局在診断を考える場合、筋肉から順に中枢にさかのぼって考えるほうが確かに整理しや

すく、多くの神経内科医が実践している実際的な方法であろう。

今回の改訂第2版も、初版の末梢から中枢へという編集方針が踏襲されており、編者の神経学をよりわかりやすくという熱意が随所にあふれた構成となっている。冒頭に置かれたカラーの「臨床に役立つ神経解剖」と病理像は神経病理学へのよい入門編となろうし、これに続く各章では、それぞれの分野の専門家が優れた各論を執筆しており、高度な内容が含まれている。特に、大脳基底核の機能に関する記載は詳細で、「ハイパー直接路」が臨床神経学のテキストに登場したのは初めてであろう。脳血管障害のていねいな解説に続いて、リハビリテーションについて1章が充てられているのも本書の特色である。

全体を通読してあえて要望するとすれば、大脳基底核に関する記述が目立つ反面、筋萎縮性側索硬化症におけるTDP43をはじめとして、最近解明されつつある神経変性疾患の



分子病態に関する新知見にも触れてほしかったこと、『神経学用語集』の改訂第3版が出版されているので、「深部腱反射」などの用語は、次の機会に改訂用語集に従って修正されるよう期待することが挙げられる。また多系統萎縮症の分類や、病的反射としての「Babinski 徴候」の記載などは、議論の多い分野だけに、いま少し解説があってもよかったと思われる。

最近の医学生はテキスト離れが進んでいるが、医学部をはじめとする学生のみならず、神経学の知識を整理したい研修医にも、学生や研修医を指導する立場の専門医・指導医にも、神経学の優れた入門書として、この良書を強く推薦したい。

B 5 頁 632 2012 年

定価 7,350 円

(本体 7,000 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-260-00601-9]

医学書院刊